自由解放軍

多賀竜騎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
自由解放軍

【Ｎコード】
Ｎ０７２４Ｐ

【作者名】
多賀竜騎

【あらすじ】
突然の法律の改正、それによって未成年（高校生以下）は、全ての権利を奪われた。その法律の改正に反対する未成年の少年少女たちは武器を取り「自由解放軍」を設立して国に立ち向かった。

初めに

え、えーと、どうも多賀竜騎です。なんやかんやでネタ無くなったので「名桜高校奮闘記」は当分投稿されません。
というわけで、新小説を進行させたいと思います。

私の友人も見てくれていたんですけど、本当に申し訳ないです。
しかし！暇があったらちょくちょく投稿しますのでよろしくお願いします。

ちなみに、私の書く小説は私の「多賀竜騎」を主人公の名前としてそのまま使っております。
一応、全作品そうするつもりです。

最初に言います、私の小説は不定期更新です。
ご了承ください。

～プロローグ～（前書き）

二回目です。
よろしくお願いします！

～プロローグ～

新西暦１５７２年、日本では、法律の内容が改正された。

それは、政治の仕組み、営業の仕組み、金銭単位の仕組み、収入の仕組み、社会全体の仕組みが変わってしまった。

そして、最後に目を付けられたものある・・・・・・・・そう・・・・・

学生たちである。

学力の向上が一向に伸びない彼等（がくせい）に刃を向けたのである。

その法律で高校生以下の未成年者の権利を全て奪った、何かを主張する権利も、さらには人権でさえも彼等から奪ったのである。

しかし、唯一、権利が認められる方法がある。

そう、成績だ。

成績が良い者達は「特校」、通称「特別未成年学校」という場所に移校された。

この特学に行けるのは、中学から成績が2年連続で向上した者である、特学では未成年でも人権というものが認められる、それが特学だ。
しかし、成績が悪い者はどうなったであるだろう？
「権利」と言う言葉が存在しないような世界に取り残されたのである。
そうした彼等を人は皆「無能力者（ゼロ）」と呼ぶようになり、迫害した。

～プロローグ～（後書き）

どうも多賀です。
書きかけの小説やめて新しいのを書き始めました。

序章　差別（前書き）

明日は、「モンスターハンター・３ｒｄ」が発売されますね。

序章　差別

新西暦１５７２年の法律改正からあっという間に5年が経った、俺はその時中一だった。
その時皆はこう言った

「訳がわからない・・」

俺もそう言った、皆よく考えてみろ、いきなり法律を変えて成績の良し悪しで差別をする。
考えられないだろ？でもそれまでこの日本が甘かったのかもしれない、これが本当の国の仕組みなのかもしれない、そう思うと仕方がないと感じてきた。
しかし、その考えも束の間だった。
成績の良い者は次々と特学に、成績の悪い者は強制学習学校（ＦＬＳ）に残された。

何時しかこの制度は当然のようになり、俺たち無能（ゼロ）力者は当然のように迫害された。
物を買うにも差別され、話しを掛けることでさえも差別された。
そして最終的にはどうなったと思う？

道を歩く事でさえも許されざる行為になったのである。
破れば捕まり罰せられる、しかし俺たちには人権なんてものは存在しない、だから弁護されないのだ。
弁護士は弁護を頼まれても引き受けてはいけない、仮に引き受けれ

ば弁護した者も弁護を頼んだ者も死罪になり一族も皆迫害される。
そんな世界が当然になったのである、そんな世界が平和だと思うか？
俺は思わない、いずれこの世界を日本を俺は変えてみせる。

何時だっていいんだ・・・・・・・

何時だって・・・・・

序章　差別（後書き）

本当に不定期ですみません。

FIRE1　男の名前（前書き）

3回目です！遅くなってすんません！

よろしくお願いします。

FIRE1　男の名前

新西暦１５７７年、９月１日。
俺は何時ものように、学校に行く準備をしていた。
俺の名前は多賀竜騎（たがりゅうき）、特校に通う無能（ゼロ）力者だ。

俺の両親は、父親が元「無能（ゼロ）力者」で。
母親は公務員だ。

俺は母親が公務員だから特校に通わしてもらっている。
ちなみに特校とは「特別未成年学校」の略だ。
父親の事についてはまた今度話そう。
もう一度説明するが、この日本は身分が区別されて上から
天皇、首相、副首相、政治家、公務員、一般市民（ここでは収入が
ある者を言う）、学生（特校）、無能（ゼロ）力者。
この順だ、ちなみに自分の収入が無い者は無能（ゼロ）力者に属する。
すっかり話が長くなっちまった、残念だが俺は学校に行かなきゃな
らない。

俺は何時ものように、支度を済ませると朝食をとり、出発した。
車庫にある自転車の鍵を外し、自転車には乗らず無能力者用道路（ゼロロード）ま
で押して行く。
乗れば即逮捕だ。

街はとても綺麗だ。
国民の街は・・・・・
しばらく歩くと無能力者用道路の入り口にたどり着いた。
ここは国道と違って汚れた道だ、分かりやすく言えば、ビル街の裏

路地のような光景だ。
俺は自転車に跨ると自転車をこぎだした、道の片隅にはホームレスが屯している。
このホームレス達は見掛けこそ恐ろしい印象だが、とてもいい人達だ。

「おはようございます。」
と俺は自転車を止めて髭を生やした老人に挨拶をした、

「ああ、おはよう、朝から元気だねぇ。」

「学校があるんで、朝っぱらからどんよりしてたら教師に殴られますよ。」

ホームレスは「ははっ」と笑ってぼそりと呟いた。

「昔はワシもその位元気があったんだけどねぇ。」
とその後に「法律改正がある前はな」と付け加えた。

「法律改正」その言葉を聞いた瞬間、俺は胸が締め付けられた。

「・・・・・俺が変えてみせます・・・この日本を。」

「そうか・・・・・夢を持つことはいい事じゃ、だがその心、決して忘れてはいかんぞ。」

「はい、でも俺はこの事を、只の夢物語で終らせる気はありません。見てて下さい、俺は必ず実現して見せますよ」

俺は振り向きペダルに足を掛けた。

「待ってくれ、君の名前を聞かせてくれないか？」

「・・・多賀竜騎、この日本を変える男の名前です。」

「多賀竜騎・・・覚えておくよ、何時か君がこの日本を変えた時、私は君に会いに行くよ。その時まで覚えていてくれよ？」

「分かりました、俺がこの日本を変える時まで待っています。そして・・・貴方に神のご加護がありますように。」

俺は老人に向かって首に掛けた十字架を掲げ、自転車をこぎ始めた。

「ありがとう、世界中の人が君みたいな性格を持っていたらな。」

俺はその言葉を背中で受け、ひたすら自転車を走り進めた。

学校の校門に着いたのは、遅刻ギリギリの七時五十五分だった。

校門の前に居た教師が、俺を呼び止めた。

「おいっ！多賀！止まれ。」

その言葉で俺は自転車を止めた。

「はいはい、何ですか？公務員の先生が、ゼロの俺に話を掛けてくるなんてねぇ、なんて光栄だ。」

そう振り向いた俺の頬に拳が飛んできた、俺はそれを寸での所で受け止め、振り払った。

「何ですか？先生、そんなんじゃ俺を倒す事は不可能です。」

「黙れ、無能力者（むのうりょくしゃ）が、ゼロの分際で一般市民に、しかも年配の人に向かってその態度は何だ？」

「何だじゃありませんよ、先生こそいきなり生徒に殴りかかるなんて、世間に知れたら大変ですよ？」

「黙れ！！貴様はこの高校の生徒では無い！ゼロには人権が無いからなぁ。」

「そうですか・・・、では先生はゼロはここに居てはいけない、というのですね？」

「そうだ！！！！正直、俺はお前が嫌いなんだよ！！ゼロの癖してノコノコと特学なんかに来やがって！！！！」

俺は冷たい目で先生を睨んだ。

「どうした！！その目は！！ヤレルもんならやってみな！！」

「敗者ッ・・いや？負け犬とでも言っておこうか？とにかく貴様に用は無い。」

俺は振り返りそのまま歩き出した、

「おい！！！ゼロの癖に逃げるんじゃねえよ！！！」

「黙れ負け犬、もう一度言う、貴様に用は無いと・・・・」

俺はそのまま玄関に向かって歩いていった・・・・

俺の日常はこうして始まる、しかし、こんな日常は只の機械と同じような日常だ。
毎日同じ行動をして、つまらない日常を過ごして暮らす。

そして、つまらなく死ぬ・・・・・・

俺はそれだけは一番嫌だ、必ず変えて見せる・・・・
このつまらない奴隷のような日常を・・・・・・・

ＦＩＲＥ１　男の名前（後書き）

誤字脱字などがございましたら、教えていただけたら嬉しいです。

ＦＩＬＥ２　仲間と敵（前書き）

久しぶりの投稿です！

まあ、長い目で見守ってください。

FILE2　仲間と敵

午前８：００

竜騎は、教室の近くを歩いていた。
竜騎は２年Ｄ組の生徒だ、そして、その２年Ｄ組は４０人学級、その内の、俺を外して１４人が親など身分関係で、特学に通っている無能（ゼロ）力者だ。
他の２５人は紛れもない、学生だ。

「廊下にワイヤー、５０センチ間隔」

竜騎は学生が仕掛けた、通称「無能力者トラップ」に掛からないように警戒しながら歩く。

「教室に到着、ドアにトラップが２パターン、その壱、黒板消し。その弐、水入りバケツ」

そう呟くと、ドアに挟まっている黒板消しを外す。
そしてドアを蹴破った、すると仕掛けてあったバケツが落ちてきて教室の床に水が撒かれた。
大抵の学生は「ちッ！」「クソッ！」などの悪態をついてくる。
だが竜騎はそんな事は構いもせずに、

「このバケツと水は、教師が来る前に片付けておいたほうが身のためだと思ういますよ」

と言いながら自分の席についた、クラスといっても竜騎たち無能力者は、教室の窓際の隅に、離れ小島のように区別されている。

竜騎達の席は３×５の長方形型で構成されている、そこで竜騎は一番真ん中の席だ。
何故なら、学生という自分達より上の身分に、唯一立ち向かったり、喧嘩をして勝利をする。
いわば、英雄扱いだ。
皆は竜騎をリーダーとしている、もちろん学生達は竜騎を畏れている。

「おい、竜騎。相変わらず俺と違って、お前は用心深いな」
「違うよ、兄さん、そうでもなくっちゃ僕等のリーダーは務まらないもの」
竜騎は、中学からの腐れ縁、野田和良（のだかずよし）とその弟の政良（まさよし）に声を掛けられた。

「違うよ。俺が用心深すぎるんじゃなくて、お前が用心深くなさ過ぎるんだよ」
「あっ！お前そんな事言うか！酷過ぎるぞ！竜騎！」
「兄さん！落ち着いて！落ち着いて！」

和良が、俺に飛び掛るのを、政良が必死に止めるのを横目に、竜騎はバッグの中身を机にぶちまけた。
机の上には各教科の教科書、ノート、筆箱といった学生の必需品の他に、竜騎はバッグ底を剥がした。
そして取り出したのは、拳銃の弾倉二つ、そして弾倉が入っていない、ＳＩＧＰ２２０を取り出した。
竜騎は、周りの目を気にせず、ＳＩＧＰ２２０に弾倉を入れてスライドを引いて弾を装填して、いつでも撃てるようにし、腰のベルトに差し込んだ。

「ていうか、竜騎？お前、何故ゆえにいつも拳銃を持ち歩いているんだ？」
「兄さん、大体護身用で持ってるんでしょ？でも銃刀法違反にならないのかな？大丈夫なんですか？竜騎さん」
「あぁ、大丈夫だよ。だって良く考えてみろ、俺達には今、人権がないんだぞ。要するに、一般市民の扱いを受けないんだ。だから銃刀法も無縁なんだよ」
「あぁ！そうか、じゃあ俺も手に入れたいなー、アッ！そうだ竜騎！お前拳銃俺の買ってきてよ、金払うから」
「馬鹿かお前は、俺の拳銃は買ったんじゃなくて、俺の親父の形見なんだよ」
「あぁ、そうか・・・そういえば、お前の父親って・・・・」

和良は言葉を詰まらせた、竜騎は和良が気を悪くしないように、声を掛けようとした。
しかし、教師が入ってきたためみんなが席に戻った。

「さぁ、今日もささやかな戦争の始まりだ」

竜騎は小声で小さく呟いた。

ＦＩＬＥ２　仲間と敵（後書き）

誤字脱字があったら、ご報告してください。

ＦＩＬＥ３　父親の過去（前書き）

やっとの投稿です！

FILE3　父親の過去

「えー、ここの問題・・・」
今は3時間目の真っ最中、竜騎は暇な時間を和良とチェスをして潰していた。
戦況は竜騎がクイーンが二つ、ポーンが一つ、ルークが一つにキングが一つ。
和良はポーンが二つ、ナイトが一つ、キングが一つという竜騎の圧勝だ。
ちなみに、竜騎は黒で、和良が白だ。
普段の和良は、ゲーム事などは負けそうになると、直ぐに降参する性格なのだが、今日は違う。
なぜなら、金を賭けているからである。
「なぁ、竜騎！すこしは手加減ってもんがあるだろ！」
「うるさい！お前が俺の金を狙って、賭けチェスやろうっていったんだろ」
「頼むよ！この三千円盗られたら、俺の財産が～！」
「残念だったな、チィックメイト」
「い・い！・いいいいやぁぁぁぁあああああああああああー！！！」
和良が悲痛の叫びを上げているのを無視し、竜騎は机の上に置いてある和良の三千円と自分の五千円を回収した。
「おい、和良。俺から金を貰いたいんなら、家に来て俺の手伝いに協力してくれたら、金をやるよ」
「それは時給だ～～～！！」
やれやれ、やっと気付いたか。
竜騎はチェス盤の上に置いてある、白と黒の駒を分けて自分のバッグにしまい込んだ。
それを見つけた教師が、竜騎の席まで行き、怒鳴り声を上げた。

「何やってんですか！無能力者は少しでも成績が上がって、一般人になれるように努力しなさい！」
その言葉に竜騎は舌打ちをして立ち上がり、教師と向き合った。
「一般人になれだと？誰のせいで無能力者になったと思ってんだ！貴様等大人のせいだろ！」
竜騎は逆に怒鳴り返した、その声にびっくりして、教師はブルッと肩を震わせた。
しかし、教師は負けずに言い返した。
「勉強と努力を繰り返せば、なれない訳が無いんです！」
「なれない訳が無いだと・・・っ、そうかお前は知らないんだな・・・」
「しらない？・・・何のことですか？」
竜騎は、目の前で口をポカンと開けている教師に、再び舌打ちをした。
「知らないようなら教えてやる、俺の父親の名前は、多賀鵬斗（たがほうと）」
竜騎がその名前を口にした途端、教師の顔が青ざめた。
「鵬斗・・・って・・・あの・・反政府テロ組織「零解放組織」総裁、多賀鵬斗！？」
「そうだ、これで分かったな？」
「でも・・・そんな危険人物の血族が、どうしてここに？」
「俺のことを哀れんだ母親が、縁を切ったのさ、だから正式には親子ではない」
けれでも、俺は・・・、俺は父さんを・・・鵬斗父さんと縁を切ったなんて思わない。
竜騎はそう思って拳を握り締めた、そして沈黙が続いた。

〜〜夕方〜〜

竜騎は、いつもとは雰囲気が少し違った帰路についていた。
何時もなら、警備員が居る筈の通常道路も、竜騎以外の人間は一人

も居なかった。
その後に、朝にホームレスと会話をした場所を通ったが、そこには一人の怯えた様子でうずくまるホームレスが居た。
竜騎はそのホームレスの元まで歩み寄った。
「おい、大丈夫か？寒いのか？」
竜騎がそう話し掛けると、ホームレスは顔を上げて、俺に向かって泣き喚いた。
「助けてくれ！！命だけは見逃してくれえ！！！」
ホームレスは酷く混乱していた、竜騎はホームレスに顔がよく見えるように話しかけた。
「おい！どうしたんだ？他の人達は？」
俺だと分かると、泣くのを止めて、俺に話した。
「他の連中は皆今日、俺たちの所に来た警備員に殺されたよ」
「なッ！・・・」
竜騎は絶句した、そして胸の十字架のペンダントを握り締めた。
「どうして・・・そんな・・・、おい！何があったんだ！」
「だから、警備員がストレス発散で・・・サイレンサー拳銃で仲間たちを撃ち殺したんだ・・・」
「それで！その後は！」
「その後は、死体を片付けて、笑いながら帰って行ったよ」
竜騎は走り出した、何も考えずに、只ひたすら。
その後、竜騎は昔よく遊んだ公園に来ていた。
そこは、とても見晴らしがよく、この街が一望出来た。
「くそっ！何でだ？俺たち無能力者の何が悪い！？俺たちは、只幸せになりたいだけなのに・・・・・くっ！うわあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」
竜騎のなんの意味も無い叫びが、街に響いた。

・

只、それだけだった・・・

ＦＩＬＥ３　父親の過去（後書き）

これからも、ぼちぼち、投稿していきたいです！

ＦＩＲＥ４　無意味な死（前書き）

やっとです！

多分、月1程度で投稿できるよう頑張ります！

FIRE4　無意味な死

ＰＭ７：００、竜騎は自宅の玄関前に居た。
その顔には、涙の跡があった。
竜騎が玄関の扉を開けて、中に入ると、家の中は、肉が焼ける良い香りが漂っていた。
竜騎がその香りに、ボーっとしていると。
「あれ～、だ～れ～？って、なんだ竜騎か」
と、キッチンの方から声と共に、黒髪のポニーテールをした少女が顔を出していた。
「あ・・・」
竜騎は少しだけ驚いたが、直ぐに笑顔を見せた。
偽の笑顔だとばれないように、必死に。
「なんで、お前がいるんだ」
「竜騎のお母さんに頼まれたんだ、今日は仕事の都合で帰れないんだって、だから家の鍵を借りて、竜騎のご飯を作っていたんだよ」
「それはありがとう」
少し間を置いて、
「麻衣」
そう呼んだ、この少女は秋里麻衣（あきざとまい）、無能力者だ。
竜騎の幼馴染で、竜騎の母親が帰れない時などに、鍵を借りて竜騎の面倒を見る。
竜騎にとっては幼馴染だが、どうやら麻衣は我が子のように竜騎を見ている。
「ねえ、竜騎。ご飯にしますか？お風呂にしますか？それとも・・・・・」
「さて、風呂に入ろうか」
竜騎は麻衣の横を通り抜けて、風呂場に向かった。
「あー！もう！まだ最後の一つを言ってないよ！」

麻衣がそう叫ぶが、竜騎はスルーした。

～風呂上り～

竜騎と麻衣はリビングで食事をしていた、今日の食卓は麻衣が作ったメニューだ。
「そういえば今日、警備員がおっきい袋を5～6個を持ってどっかに歩いて行ったけどなんだったんだろうね」
麻衣がふとそんなことを言ってきた、竜騎はハッとした。
「なにっ！！」
突然竜騎はテーブルを叩いて立ち上がった、麻衣は驚いて箸を落とした。
「おいっ！それはこの番地の警備員か！？」
「えっ？あっうん、確かそうだったよ」
竜騎は拳を握り締めた。
「クソッ！やっぱりあいつらが！あいつらが殺ったのか！」
竜騎は壁を殴った。
「竜・・・騎？何かあったの？泣きながら怒って」
麻衣に言われふと我に返った、目からは涙がこぼれていた。
「今日、私が見た事と竜騎が泣いていることは、何か関係があるの？」
「実は・・・・・今日、ホームレスの人達が数人殺されたんだ」
竜騎は今日あった事を話した、警備員が殺したこと、そしてその袋の中身がホームレスかもしれない、ということを。
竜騎は話している途中で、温かい飲み物と食パンと毛布を持って、外に飛び出していった。
数分すると、裏路地に着いた、竜騎は裏路地に入っていった。
「誰だ！」
そう叫ばれたのと同時に、ゴミの山から鉄パイプを持った男が出てきた。

「俺ですさっきの」
しばらくホームレスは警戒していたが、思い出したのかその場に崩れ落ちた。
「大丈夫ですか！？」
竜騎が駆け寄ると。
「大丈夫だ、ちょっと安心しただけだ」
と言って近くにあったゴミ袋に腰掛けた。
「おじさん、これ少ないけれど」
そういって持ち物を差し出した、ホームレスはそれを受け取ると、また泣き出した。
「ありがとう、こんな私のためにここまでしてくれて」
「いいんですよ、それにあなたは立派な一人の人だ、無能力者なんかじゃない」
「ありがとう・・・・本当にありがとう」
竜騎はその場から立ち去った、そして家の前まで来た所で、突然一発の銃声が聞こえた。
「！？」
竜騎は腰からＳＩＧＰ２２０を取り出すと、音がした方に走り出した。
しばらくすると、先程のホームレスが血だらけで倒れていた。
そして、竜騎は見た、その場から歩いて立ち去る、警備員の姿を。
「くそぉぉぉぉ！！」
竜騎は叫んで引き金を引いた、銃声と同時に、警備員は走り去った。
「おじさん！」
竜騎はホームレスの元に走りよった、竜騎がホームレスを抱きかかえると、ホームレスが目を開けた。
「グフゥ・・・あぁ、君か・・・・大丈夫か？・・・・」
「何言ってるんですか！！おじさんこそ大丈夫ですか？」
竜騎はそう言ったが、全然大丈夫では無かった。
ホームレスは左胸を一発撃たれていて、それは恐らく心臓に当たっ

たものと考えてもいい。
それはすなわち、助からないと言うことだった。
だが竜騎は焦っていた。
「とにかく、病院に行きましょう！今救急車を呼びますから！」
竜騎は携帯を取り出し、１１９番に掛けた。
『はい、どうかしましたか？』
「おい！助けてくれ！人が撃たれたんだ！」
『分かりました、患者の身分を証明できるものはありますか？』
それは市民か無能力者かを、確認するための質問だった。
「くっ！あ・・あるわけ無いだろ！無能力者のホームレスなんだから！！」
『無能力者の場合は、保健所に連絡をしてください』
「くそ！」
竜騎はそう言って、電話を切った。
「君・・・もういいんだよ・・・・私はもう・・・十分に生きた・・・」
「何言ってるんだよ！人だろ！一人の日本人だろ！」
「私は・・・・私が生まれ変わった時は・・・平和な世の中に・・・・なっているのだろうか・・・」
「あぁ、なっている！俺が変えてみせる！だから死ぬな！」
「ああ・・・君の夢が・・・・叶う・・・ように・・・そして・・・他の人を・・・・無能力者を救って・・・やって・・・く・・・れ・・・」
そう言った瞬間、手を握っていた力が抜け、ぐったりしてホームレスは動かなくなった。
「おい！おじさん！おい！くっ・・・クッソォォォォォォォォー！！！！」

竜騎の叫びが裏路地に響き、
住宅街に響き、
そして麻衣の耳に届いた。

空は・・・・・・月は・・・・・・

満月だった。

ＦＩＲＥ４　無意味な死（後書き）

まぁ、兎に角早めに投稿出来たらいいな～

FIRE5　夢（前書き）

投稿だけども、ストックがあるから、安心だ～

FIRE5　夢

午後十時、竜騎は自室のベットに腰を掛けていた。
あの後、銃声を聞きつけた近所の人が、警察に通報した。
竜騎は無能力者だったので、警察に目を付けられるのは不味い、だからホームレスを棄てて逃げた。
「クソッ！」
竜騎は悪態をついた、それと同時に部屋の扉が叩かれた。
「入っていいぞ」
そう言うと、扉が開かれ、麻衣が入ってきた。
麻衣は竜騎の家に来ると、大抵泊まっていた。
麻衣は少し様子が変で、下を向いて俯いていた。
「どうした？麻衣」
竜騎がそう呼びかけた。
「えっと・・・あの・・だ・大丈夫かな～？って」
「何がだ？」
「さっきの警察って、竜騎が原因なんでしょ？」
「・・・・・あぁ」
少し間を置いて、竜騎は答えた。
「ホームレスのおじさんは？」
「・・・・・・くれ」
「えっ？」
竜騎が何かを呟いたが、聞こえずに聞き返した。
「聞かないでくれ・・・」
竜騎の心の中は、ものすごく複雑で、なによりボロボロだった。
「分かった、ごめんね、竜騎」
「・・・あぁ」
竜騎は寂しげに、そう答えた。
「じゃあ、私もう寝るね」

麻衣はそういって扉を閉めようとした。
「おやすみなさい、竜騎」
扉が静かに閉められた。
「あぁ・・・おやすみ・・・」
竜騎は電気を消して、ベットに横たわった。
そして今日あった事を思い返してみた。
朝、ホームレスのおじさん達と話しをした事。

教師に殴られそうになった事。

何時もとまったく同じ生活・・・生徒が仕掛けた罠を回避した事。

和良とチェスをした事、教師に父親の存在を知らせたこと。

父親、多賀鵬斗。

ホームレスのおじさん達が殺されたと聞いて、公園で叫んだこと。

そして、目の前でおじさんが死んだ事。

これは全て、今日一日であった事。
「すまない・・・おじさん・・・」
竜騎は押しつぶされたような声を出した。
そして、また涙が流れた。
ふと竜騎はカレンダーを見た、日にちは六月九日。
「あの日まで、あと一日か」
そう呟くと、竜騎は静かに目を閉じて、眠りに落ちた。

竜騎は夢を見た、それは懐かしい思い出の夢。
そして、竜騎の運命を変える思い出の日。
あの・・・あの六月十日の出来事の夢を。
新西暦１５７３年、法律改正が成されてから一年が経った。
そのころは、まだ緩く、何時もと変わらない日を送っていた。
竜騎の父親は、法律改正に異を唱え、デモ活動をしていた。
母親は、普通に仕事に行っていた。
竜騎はその日、何時ものように友達と皆で下校していた。
下校の途中に、パトカーや救急車のサイレンが鳴り響いていた。
竜騎は火事か何かだと思い、気にも留めなかった。
その時、警察の車両が竜騎達の横に止まり、声を掛けてきた。
「君達！すぐに家に帰りなさい！」
「えっ、何かあったんですか？」
竜騎は警察官に質問した。
「今、街でデモ活動をしていた総勢４２０人が暴徒化したんだ」
「暴徒化って？」
「市民が武装して暴れているんだ、直にここも荒れるだろう」
「それは、どの辺りで起きたんですか？」
「第二相模市辺りだ」
「なんだって！！」
竜騎は声を張り上げた、なぜなら竜騎の祖父母は、そこに住んでいたからだ。
「じゃあ、お巡りさん！『木漏れ日園』という、老人ホームまで乗せて行ってください！」
「えぇ！？だめだ、あそこは特に危険な・・・」
「それでも、行きたい！行かなきゃだめなんだ！」
竜騎は叫んで訴えた、警察官は竜騎のあまりにも必死な願いに負けた。

「いいだろう・・・乗りなさい。その代わり、危なくなったら直ぐに引き返すぞ」
「えっ？あ、ありがとうございます！」
そう言うと、竜騎は直ぐにパトカーに乗り込んだ、竜騎の祖父母は彼にとって特別な存在だった。
何故かというと、竜騎は幼い頃から、祖父母の家で育った。
竜騎の母親は仕事で何時も居なかった、それに父親も日本のあらゆる政策の問題を指摘していた。
竜騎の世話は何時も、祖父母の役目だった。
竜騎にとっての祖父母は、親のような存在だったのだ。
だから、竜騎はここまで必死だったのだ。
「よし、ここから第二相模市だ。気をつけろ！」
「は・・はい！！」
竜騎の足は震えていた、とても怖かったからだ。
しかし、竜騎の恐怖も、これから真の恐怖に変わることを、まだ誰も知る由も無かった。

竜騎は目を覚ました、起き上がろうとするが異変に気づき掛け布団をめくる。
そこには、麻衣が寝ていた、恐らく夜中に忍び込んだのだろう。
「まったく・・・」
竜騎はそう呟いて、ベットから出た。

着替えを済ませて、部屋から出ようとした時。
「ん・・竜騎・・・」
麻衣が寝言を言ってきた、竜騎は細く微笑んでから。
「おはよう、麻衣」
そう呟き、扉をそっと閉めた。

ＦＩＲＥ５　夢（後書き）

次回予告

「ＦＩＲＥ６　一般人と無能力者」

お楽しみに★

FIRE6　一般人と無能力者（前書き）

月2の投稿、12月分はこれで終わりです。

FIRE6　一般人と無能力者

麻衣が目を覚ますと、竜騎の姿が見えなかった。
布団から出て扉を開けると、物音が聞こえた。
その音は、竜騎の母親の部屋の隣、鵬斗の部屋からだった。
音を立てないように、ゆっくりと扉を開けた。
そこには、竜騎が居た。
質素な部屋の窓際には、大きな作業台があり、竜騎はそこに向かっていた。
麻衣は声を掛けようとしたが、竜騎の持っている物を見て、言葉を飲み込んだ。
竜騎が持っていたのは、ＳＩＧ・Ｐ２３０という拳銃、それと札束だった。
目の前の状況に呆然としていると、竜騎がふと麻衣の方を見た。
「・・・麻衣、どうしたんだ？」
そう言いつつ、竜騎は手に持っていた物を引き出しにしまった。
「どうした？麻衣、そろそろ帰らなくて良いのか？」
竜騎はとても優しく、麻衣に微笑みかけた、何かを隠すように。
「・・・・したの」
「？、何だって？」
竜騎は表情を変えずに、聞き返した。
「どうしたの？」
「？どうしたって、何がだ？」
「銃とお金」
麻衣は重々しくその口を開いた、その言葉を聞いた瞬間に竜騎の表情が曇った。
「一体何に使うの？」
「・・・・見ていたのか・・・・・今の」
「う、うん、それで何に使うの？銃とお金」

竜騎は目を逸らした。
「ねえ、まさか復讐でもするの？駄目だよ、人を死なせちゃ」
「麻衣、この銃は友達にあげるんだ、金は・・・知らないほうがいい」
そういうと、竜騎は引き出しからＳＩＧ・Ｐ２３０と金をバックに入れて、足早に階段を下りていった。
麻衣がリビングに向かうと、竜騎は既に朝食を食べていた。
「ねえ、竜騎、友達って・・・特校の？」
「あぁ、無能力者だ。俺の一番信用できる奴だ。親友と言ってもいい、あぁそれとアイツも元気だよ」
そう、麻衣は呟き、そしてまた質問した。
「ねぇ、その人なんかに銃を渡して、一体何をするつもりなの」
「・・・・・・」
「答えてよ、竜騎！」
「ご馳走様」
竜騎は食器を片付けて、洗面所に向かった。
麻衣はそれを追いかけて行った、洗面所では竜騎が歯磨きをしていた。
しかし麻衣は何かを聞く訳でもなく、唯呆然と立ち尽くしていた。
竜騎はその脇をさっとすり抜けて、玄関に向かい外に出て行った。
麻衣はたった一人残された、その目にはとてつもない悲しみが表れていた。

竜騎は無能力者通行禁止区域を自転車で走っていた。
警備員が竜騎に気が付き停止させようとする、しかし竜騎はぶつかるような勢いで突破していった。
綺麗に整備された一般道路、路地裏への入り口、汚くゴミだらけの無能力者専用道路。
それぞれを見て、竜騎は思った。

一般市民と無能力者。

しかし、どちらとも同じ人種、同じ民族、同じ人間。

なのになぜここまで差別され、迫害され続けなければならないのだろう。

三年前までは、何も無い平和な、平和な日常があったのに、どうして俺たちだけ、どうしてなんだ？

「フッ・・・」
竜騎は微かに微笑んだ、変えなければいけない、この仕組みを、この社会を、この国を、俺が。
誰かがやってくれると思ったら大間違いだ、自分で行動しなければ何かを変える事なんて不可能だ。
鵬斗父さんだって、間違いには自分で指摘し、自分で行動した。
だから、俺もやるんだ、やらなければいけないんだ。
あの日から・・・、二年前のあの日から、俺はずっと思ってきた。
しかし、あの頃の俺にはそれを成し遂げるだけの力が無かった。
だが、今なら出来る、成し遂げるだけの力を手に入れてしまった。
それなら、やるしかない、成功しようが失敗しようが歴史に残るだ

けでも良い。
それでたくさんの人に、俺たち無能力者の考えを知ってくれれば良い。
そうすれば、何時の日かこの社会の間違いに気付き、指摘してくれる人が増えれば、それでいい。

やらなければ・・・・・鵬斗父さんに代わって。
そして、あいつに・・・麻衣に、平和な世界を見せてやるために。

俺が・・・・・俺が！！

ＦＩＲＥ６　一般人と無能力者（後書き）

次回「ＦＩＲＥ７　行動」
お楽しみに！
では、又来年！

FIRE7　行動（前書き）

なんか、ストックをやめたんで、投稿したいと思います。

FIRE7　行動

六月十日、ＡＭ８：００、第三横浜自治区。
第三横浜特別学校、二年Ｄ組。

竜騎は学校に着くと同時に、和良の所に行った。
「おい、和良」
竜騎は和良に話し掛けた。
「？、どうした、竜騎」
「受け取れ」
竜騎はそう言って、鞄からＳＩＧ・Ｐ２３０を取り出し、和良に渡した。
「え？何これ、俺にくれるの？」
「あぁ、俺はこれから行動を起こす。最初の任務だ」
竜騎が言った『行動』と言う言葉は、意味など言わなくても和良は理解した。
「・・・分かった・・・」
「第三横浜駅に午後四時に集合だ、遅れるなよ」
竜騎はそう言って、自分の席に着いた。
「竜騎・・・お前、本気なんだよな・・・」
和良はそう呟いて、拳銃を握り締めた。

ＰＭ３：５５、第三横浜駅前。
竜騎は学生服にパーカーを着て、スポーツバックを肩から掛けてい

た、学生服のボタンは全て開け、フードを被っていた。
もちろん内ポケットには、拳銃が入っていた。
「おい、竜騎」
背後から話し掛けられて、竜騎は振り返った。
そこには、学生服の少年が三人と一人の少女が居た。
「和良、何故政義が居るんだ、それにこいつ等も」
「あぁ、政義は俺の弟だから、当然だろ」
和良は政義の頭を撫でながら言った、それを振り払う様に頭を振って竜騎に歩み寄った。
「竜騎さんが何かをするんだったら、何も出来ない僕でも、お役に立てたらな、と思って」
「フッ、そうか、頼むぞ政義」
ハイッ、と政義が元気に返事をすると、横に居た少年が喚きながら竜騎の前に立った。
それと同時に少女も話し掛けてきた。
「おい、竜騎！俺についてはコーコメントか！」
「そうよ！折角来てやったのに！」
少年の名前は山本雄也（やまもとゆうや）。
少女の名前は宮下刃澄（みやしたはすみ）。
二人とも昔からの幼馴染で、この二人は麻衣と竜騎との四人でよく遊んでいた。
「お前達、俺の予定とは大分ずれているんだが」
「？、何でだ？竜騎」
和良が首を傾げた、他の三人も同じ様子だった。
「金が足りない・・・」
「へ、金？一体何に使うのよ？」
刃澄は？だらけだったが、竜騎は構わず駅の中に入って行った。
「おい、竜騎！何処に行くんだよ」
「第二相模市だ」
竜騎は重々しく答えた。

「えっ？だってあそこは今、スラム街になっているんじゃないか？」
「いいんだ、目的地は其処だ」
皆はしばらく疑問を抱いていたが、竜騎が改札口まで歩いて行ってしまったので、しかたなく付いて行った。
電車に乗り込み、席に着くと刃澄が竜騎に囁いた。
「ねえ、竜騎。麻衣はどうしたの？」
「麻衣？あぁ、元気だよ。昨日も家に来ていた」
そう言うと、何故か刃澄は喜んだ。
「おい、ところでこれからどうするんだ？第二相模市はスラム街だから電車じゃ降りれないぞ」
雄也が竜騎に近づいてくると、他も集まって来た。
竜騎は含み笑いをし、スポーツバックを開いた。
「だから、こいつを使って途中下車する」
バックの中にあったのは、ペットボトルと少量の水、そしてドライアイスだった。
「こいつって・・・昔やった爆弾の材料じゃね？」
「そう、ペットボトルにドライアイスを入れて、水を入れて蓋をする、後は待てば爆発だ」
そう言って竜騎は、ペットボトルにドライアイスを砕いて入れて、水を入れた。
蓋はせずに、立ち上がり、先頭車両まで歩いて行った。
先頭車両の乗客は、殆どが眠っているか、音楽プレイヤーを操作していた。
竜騎はすかさず、ペットボトルに蓋をして、操縦室の小窓に置いた。
その後は、何事も無かった様に、和良達の所に戻って来た。
「さぁ、待とうか」
そう言うと、竜騎は席に着いて、バックの中身を整頓しだした。
それからしばらく、物凄い音が電車内に響き渡った。
それと同時に、電車が急停止した。
「ほら、丁度だぞ。第二相模市に着いた」

そういって窓ガラスを、拳銃で叩き割って、外に出た。
「急げ、警察が来る前にここを離れるぞ」
竜騎の言葉に全員が外に出た、そしてスラム街に入って行った。

FIRE7　行動（後書き）

皆さん、良いお年を。

FIRE8　零解放組織（前書き）

ストックです、宜しく。

FIRE8　零解放組織

竜騎達は、スラム街の中を進み、ある一つの場所に着いた。
そこは、スラム街の中では一際目立つ、寂れた廃工場だった。
「な、なあ竜騎、ここに一体何があるんだ？」
少し引き気味な声で、雄也が尋ねた。
「いいから、シャキッとしろ」
竜騎は構わず、廃工場の入り口まで歩いて行った。
そして、大きな鉄扉に手を掛け、横に開いた。
鉄扉は錆びていて、動くたびに鉄と鉄が擦れあう、耳障りな音が響いた。
「よし、入るぞ」
竜騎は皆に呼びかけ、中に入り、皆はその後を付いて行った。
「ちょっと竜騎、何も無いぞ」
和良が呟いた。
「一体何があるんですか？」
と政義。
竜騎何も言わず、唯、奥に進んでいった。
「ッ！」
咄嗟に竜騎が、腰のベルトから拳銃を取り出した。
「おい？竜騎、どうしたってウワァ！」
雄也が尋ねたが、その質問を言い終わる前に、皆に光が照らされた。
「クッ！何だ！？」
目が慣れて、皆が辺りを確認すると、頭上の鉄筋、二階の通路、そして直ぐ前に銃を突きつけた男達が居た。
「止まれ！学生が何の様だ！？」
リーダーと思われる、背の高い男が銃を突きつけながら、こちらに歩み寄ってきた。
「何、怪しい者じゃない、それにこっちはアンタに少し話がある」

竜騎は手を挙げながら、フードを外した。
「一体誰だ・・ってえ？竜騎？竜騎じゃないか！」
「こんにちわ、久しぶりですね、東条さん」
リーダーと思われる男が、銃を下ろし、竜騎に走り寄った。
彼の名は、『東条双吉（とうじょうそうきち）』多賀鵬斗の死後、零解放組織の総裁となった。
鵬斗とは昔からの友人で、鵬斗が総裁の時、幹部として鵬斗を支えた男だった。
たまに竜騎は鵬斗に連れられ、双吉と会っていた。
「竜騎、久しぶりだな。何年振りだ？」
「そちらこそ、全然変わりが無いですね」
つい先程まで、殺気が漂う空気とは一転、二人は笑いながら昔話をしていた。
その後ろ姿を見ながら、和良が溜息を吐き、二人に話し掛けた。
「おい、竜騎。で、一体何が目的で来たんだ？」
「ああ、おっとそうだった」
竜騎はハッとした顔をして、双吉の方を見た。
「東条さん、少しお願いがあるんです」
「ん？何だ、言ってみろ」
双吉が首を傾げながら言った、竜騎は小さく頷き、口を開いた。
そして、言葉を発した、はっきりと、前を向いて。

「実は、銃を購入したいんです」

竜騎は真剣な目つきで、そう言った。

確かに、そう言った。

ＦＩＲＥ８　零解放組織（後書き）

クリスマスですね、良いですね。
次回予告「ＦＩＲＥ９　武器」

FIRE9　武器（前書き）

連続投稿二回目、キターッ！

FIRE9　武器

「実は、銃を購入したいんです」

竜騎の言葉で、工場の空気が変わった。

周りの大人達は、驚いてざわめく者もいれば、馬鹿にしたように野次を飛ばす者も居た。

「黙れっ！！」

ざわめきが頂点に達しようとした時、双吉が叫んだ。

双吉がそう叫ぶと、大人達は一斉に静まり返った。

しかし、そう怒鳴った彼でさえも、驚きの色を隠せないで居た。

「何故、突然そんな事を言う？」

「この間、近所に居たホームレスの人達が殺されました」

その言葉で、又も周りがざわめいた、しかし竜騎は気にせず言葉を続けた。

「もちろん、無能力者です。彼等は拳銃を持った警備員に、殺されました。そして、生き残った一人も夜中に殺されました。そして、おじさんに言われました、『他の人を、無能力者を救ってやってくれ』と」

その話を聞いていた数人の男が、悪態を吐いた。

「何故、殺されたんだ！」

双吉は叫んだ、その声は、明らかに怒りが現れていた。

「多分、ストレス発散か何かでしょう」

竜騎は呟いた、双吉は悪態を吐いて、泣き出した。

そして更に、言葉を発した。

「綺麗な一般市民の道路、ゴミだらけの無能力者の道路。誰かが変えなければならない、この国を、そう思ったんです。父さんのように、間違いには指摘しなければいけない、だから、俺は今日、此処に居るんです」

竜騎の言葉は、否定のしようが無い、紛れも無い事実だった。
「・・・そうか、ならば断る余地は無い、吉田！」
双吉がいきなり叫んだ、すると、吉田と呼ばれた男が近づいてきた。
「はい！何でしょうか？」
吉田は、敬礼をしながら、双吉に尋ねた。
「竜騎を武器庫まで案内しろ、私も直ぐに行く」
「分かりました」
吉田は、承諾をした後に、竜騎達を武器庫へと案内した。
しばらく、歩いていると、吉田が急に止まり、竜騎達の方へ振り返った。
「ここが、武器庫です」
そう言って、案内されたのは、鉄製の少し狭い、扉だった。
「ここが・・・武器庫？」
「はい、今扉を開けます」
吉田は、腰から鍵を取り出し、扉の錠を外した。
「どうぞ」
手招きをされて、竜騎達は中に入った。
「おおぉ～～！」
和良は驚きのあまり、盛大に叫んだ。
「わあぁ～」
刃澄も、驚いて辺りを見回した。
「「・・・」」
雄也と政義は、声が出ないほど驚き、ポカンとしていた。
「あ・・あ」
竜騎は、一言も喋らず、辺りを見回した。
武器庫の中には、今はもう時代遅れの、ボルトアクション式のライフル銃が、辺り一面に広がっていた。
その他にも、機関銃らしき物や、手榴弾、拳銃など、戦闘に必要と思われる物が、揃えてあった。
竜騎は立て掛けてある、ライフル銃を手に取った、ズシリと重みが

感じられた。
「これは・・・三十年式歩兵銃か？」
「おぉー、良くご存知ですね、銃です」
三十年式歩兵銃。
大日本帝国軍が、正式にに使用していた銃。
「何でこんなものが？・・・」
竜騎は呟いた、日露戦争では帝国陸軍の主力小銃として使用された、三十年式歩兵銃。
そんな、昔の銃がどうしてこんな所に、しかも大量に在るのか、竜騎はそう思っていた。
「どうだ、何か良い物でも在ったか？」
不意に後ろから声がした、竜騎は素早く振り返った。
だが、そこに居たのは、双吉だった。
「なんだ、東条さんか」
竜騎はそう言って、銃を置いた。
「どうだ、この銃は？上等の物だぞ」
双吉は得意げにそう言った、しかし、竜騎は直ぐに疑問をぶつけた。
「こんな、昔の銃、何処から入手したんですか？」
「え？あ、あぁ、この銃は、俺の行き付けの武器商人から、大量に購入したんだ。古い銃だから、安価だし、何より扱い易い。だから俺達は、こう言う古い銃を使っているんだよ」
「でも、誰が昔の銃なんて作って、売ってくれるんですか？」
「協力者が居てな、その人から買っているんだよ」
竜騎は置くに入って行き、機関銃を取り出し、双吉に尋ねた。
「これもですか？」
「あぁ、それは、九二式重機関銃と言って、それも大日本帝国軍正式採用の重機関銃だよ」
その後も、色々と説明を受けながら、銃を紹介して貰った竜騎は、本題に入ることにした。
「じゃあ、購入額ですけど・・・」

「ん？金？そんな物要らないよ、この銃は元々鵬斗の物だったんだ、云わば、これは子供である君に返すべき物なんだよ」
「・・・・・ありがとう御座います」
竜騎は、頭を深々と下げた。
「ところで、一体何丁持って行くんだ？」
「・・・ざっと、ライフルは五十丁、それと、機関銃も十丁程度貰って行きます」
「分かった、弾も其れなりに、今からトラックで家まで運んでおくよ」
そう言って、双吉は無線機を取り出した。
「至急、トラックを出せ、ライフル五十丁、機関銃十丁を、これから指定する場所に運べ」
『了解しました、弾薬もですか？』
「そうだ、弾薬もだ」
一言そう言うと、無線機をしまった。
「よし、これで無事に君の家まで着くよ」
双吉は、笑って言った。
「ありがとう御座います、何から何まで」
竜騎は再び、頭を下げた。
「いいんだよ、そんな事より・・・」
双吉がそう言った時だった。
突然、大きな音と共に、地面が揺れた。
「！？、何だ！？」
双吉は壁に手を掛けて、転倒を防いだ。
すると、銃を持った男が入ってきた。
「東条さん！敵です！政府に此処を知られた模様！」
「何だって！？状況を！」
双吉は顔を青ざめ、叫んだ。
「既に、囲まれています！今、総員、迎撃態勢に入らせました！」
「分かった、私も向かう！」

双吉はそう言うと、竜騎達の方を向き。
「竜騎、此処は危ない、吉田と共に、トラックに乗って脱出しろ！」
「東条さん！？」
吉田が顔を歪め、双吉の肩を掴んだ。
「どうしてです？私も戦います！」
どうやら、脱出する事に、不満が在った様だ。
「お前は、まだ若い。それに、竜騎は私達に、この日本の未来の為に、必要なんだ」
吉田はしばらく、考えていたが、直ぐに双吉に向かって敬礼をした。
「ご無事で・・・」
「あぁ、分かっている！」
そう言うと、双吉は走り去っていった。
吉田は竜騎達に向かい、声を掛けた。
「さあ、脱出しましょう。トラックは、この工場の地下にあります。付いて来てください」
吉田は武器庫から出ると、安全を確認し、ライフルを一丁持って、手招きをした。
竜騎達も、それに続いて、走り出した。
唯、生きる為に。

そう、生きる為に・・・

FIRE9　武器（後書き）

ストックはこれで終わりです。

ＦＩＲＥ１０　殺害（前書き）

新年明けましておめでとう御座います。
何と言うか、とても今年は激動の一年だった、と思います。
これからも、この２０１２年よろしくお願いします。

FIRE10　殺害

脱出口を目指して、地下通路を走っているときに、竜騎は静かだった。
その時、竜騎は考え込んでいた。
もしかしたら、自分のせいで、此処がばれたんじゃないか、と。
しかし、今そんな事を悔やんでも、何も戻らない。
竜騎はそう考えた、そして動かしている足に、更に力を込めた。
途中、通路が終わっていた、終わっていたと言うよりは、無・く・な・っ・て・い・た。
無くなっていた、と言うのも、恐らく爆発で崩れたものだった。
「クソッ！此処は駄目か。じゃあ、あっちの通路を通るしか無いか・・・」
吉田は壁を蹴って、呟いた。
「どうかしたんですか？早く別の通路を見つけましょう」
竜騎は声を掛けた、すると、吉田は竜騎の表情を気にしながら、話を切り出した。
「実は、此処の他に通れる場所は、無い訳ではないんですけども、前線の塹壕を通る事になってしまうんです」
要するに、此処の他に目的地に着くには、迎撃態勢に入っている、前線陣地の塹壕の中を、突っ切って行かなければならない、と言うことである。
しかし、竜騎はそんな事はどうでも良かった。
「でも、そこしか無いのなら、行くしかない！」
竜騎は、竜騎の眼は、『生きる』、唯それだけが表われていた。
「分かりました、十分な覚悟をして下さい」
吉田は諦めたのか、全員に確認をとった。
「当たり前でしょ、覚悟なんかしないわけ無いじゃない！」
刃澄は、余裕の表情でそう言ったが、足が強張っているのを見れば、

恐怖が募っている事が分かった。
「やるしかないんだろ・・・」
和良は、溜息混じりに呟いた。
「竜騎さんが行くのなら、着いて行くだけです」
政義は、とっくに覚悟が決まっている様だった。
「やってやる・・・全然大丈夫だ！」
雄也もそう言った、ここに居る全員は、既に覚悟が決まっていた。
「行きましょう」
吉田は、再び元来た道を、走って戻った。
「行くぞ」
竜騎も走り出した、また地面が揺れ、皆がよろめいた。
塹壕にたどり着くと、外の空気を身体に受け、竜騎は辺りを見回した。
塹壕の広くなっている所では、担架に乗せられた怪我人が居た。
血塗れの人や、腕が不自然な方向に曲がった人、腕が途中から無くなっている人も居た。
銃声や爆発音、悲鳴や怒声、様々な音が鳴り響き、竜騎の耳を刺激した。
竜騎は、吐き気がして、その場に座り込んだ。
すると、一人の兵士が銃を片手に、吉田に向かって来た。
「どうした？此処は最前線だぞ！危険だ避難しろ！」
どうやら、警告をしてきたらしい。
「あちら側の通路が、爆発でやられたんです！此処を突っ切るしかありません！」
「だったら、護衛の一人や二人何故つかせない！銃弾が当たったらどうするつもｒ・・」
しかし、その言葉が、終わらない内に、兵士は頭を撃ち抜かれて、地面に倒れた。
「！？、しっかりして下さい！・・・クソ！」
吉田はライフルで、塹壕の向こうに居る、敵を狙って撃った。

しかし、敵に当たった気配は無く、銃弾の嵐が塹壕を襲った。
「クソッ！・・・」
竜騎は、ポツリと呟いた、しかし、その言葉を聞いている者は居ない。
すると、竜騎の目の前に、ライフルが落ちている事に気付いた。
「やってやる・・・！」
竜騎は、素早くライフルを拾い上げ、弾を確認した。
五発フル装填がされてあった、ボルトハンドルを引き、弾を装填する。
塹壕に落ちていた、鉄のヘルメットを拾い、頭に被った。
「喰らえ！」
そして、塹壕から頭を出し、狙いを定める。
しかし、銃弾の嵐のせいで、狙いが定められず、頭を下げた。
銃弾が収まったのを見計らって、頭を出し、狙いは定めずに、引き金を引いた。
その瞬間、物凄い銃声と共に、肩に衝撃が走った。
「反動が！・・・」
直ぐに頭を下げ、弾を装填する。
そして、弾幕が収まると同時に、頭を出し、今度はよく狙った。
一人の兵士が、こちらに向かって走って来るのを見つけ、それ目掛けて、引き金を引いた。
また、肩に衝撃が走ったが、グリップを強く握り、反動を抑える。
それとほぼ同時に、敵が身体から血を噴き出し、その場に倒れ込み、動かなくなった。
その時、竜騎は気付いた。
俺は、俺は初めて人を殺してしまった、と。
戦闘の最中、その事で竜騎は思考停止になってしまった。
戦闘は、まだ続く、これから先も、ずっと、ずっと。

FIRE10　殺害（後書き）

次回「FIRE11　戦場」
お楽しみに。

FIRE11　戦場（前書き）

と言うことで、活動報告にも書いたように、投稿です。

FIRE11　戦場

ＰＭ５：００・・・第二相模市、廃工場。

竜騎は、爆音が響く塹壕の中で、一人後悔をしていた。
人を・・・殺って・・・しまった、あんなに簡単に・・・あんなに呆気なく。
竜騎は、人が殺し合う場所に、自分が今居る事実。
そして、その場所で、衝動的に、唯自分を守るために、人を殺めてしまった事実。
様々な思いが交差し、竜騎の手足を震えさせた。
その様子に気付いた吉田が、竜騎に走り寄って来た。
「竜騎さん！如何しました？早く行きましょう！」
竜騎が、正気を取り戻し、辺りを見回すと、既に後退を始めていた。
周りには、吉田と和良達、沢山の零解放組織の人たちの死体、沢山の銃。
「だめだ・・・」
竜騎はふと呟いた。
「如何したんですか？何が駄目なんですか？」
吉田が、竜騎の肩を揺さぶりながら、聞いた。
「ライフルなんかじゃ・・・勝てるわけが無い・・・」
「！？・・・」
竜騎の答えは、吉田を大きく動揺させた。
政府の兵士達は、主に８９式小銃と言う、自動小銃などを装備している。
だが、竜騎達は、旧式のボルトアクション式のライフル。
差が在り過ぎる、これでは、戦いにすらならない。
「とにかく！今は此処から離れましょう！」
吉田は竜騎の肩を持ち、走り出した。

竜騎は、走っている途中、後ろを振り返った。
敵兵が、塹壕に入り込み、生き残っている人達を撃ち殺す。
命乞いをしている者も居る、しかし、何の躊躇いもせず、自動小銃を撃ち放った。
命乞いをしながら、悲鳴を上げ、血を噴き出し倒れる人。
乾いた音と、断末魔の叫び、怒声、敵の笑い声。
竜騎の耳に入ってくる音は、全てが新鮮で、全てが、もう聞きたくないと、本気で思えた。
地下通路に入ると、既に敵に入られていた。
吉田は、ライフルを物陰から打ち続けた。
刃澄は、その側でしゃがんでいた。
和良と政義、雄也達は、唯、恐怖に震えていた。
竜騎も柱の陰から、ライフルを撃った。
しかし、反動のせいで、全く当たる事は無かった。
吉田が撃つたびに、敵の声が聞こえた。
「待て！柱の陰に居る奴は、弾が当たってこないぞ！もう一人を殺れ！」
「クソ！腕をやられた！」
どうやら、敵の狙いは命中率が良い、吉田のようだ。
竜騎は、自分に気を逸らさせようと、ライフルを撃つ。
しかし、どの弾も、敵には当たらず、近くの壁や天井に当たる。
すかさず、敵が小銃を撃ち、竜騎からチャンスを奪う。
「クソ！このままじゃ・・・！」
竜騎はリロードをしながら、呟いた。
ライフルの残弾は三発、既に装填している弾を合わせれば、残りは八発だ。
敵は五人、全員が８９式小銃を装備している。
竜騎は、考えた、しかし解決方法は見つからない。
その時、敵が居る通路から、何かが転がってきた。
それは、深緑の色をした、球体だった。

竜騎は、それが何なのか、いち早く理解した。
「皆！伏せろ！！手榴弾だ！」
竜騎は全力で、手榴弾を蹴飛ばした。
蹴飛ばすと同時に、竜騎は柱の陰に、素早く滑り込んだ。
滑り込んだ瞬間、爆音と共に、手榴弾が爆発した。
爆音と同時に、竜騎も足に激痛が走った。
竜騎の視界が、砂埃で何も見えなくなった。

FIRE11　戦場（後書き）

そろそろ、波に乗ってきた感じです。
これからもよろしく。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0724p/

自由解放軍

2012年1月13日02時39分発行